方言語彙の基礎的研究（三）

――老・少二層の副詞語彙の差異の実態とそれが意味するもの――

室山敏昭

はじめに

いわゆる「程度副詞語彙」においては、老年層と少年層との間に、かなりいちじるしい差異的対立がみとめられる。筆者は、昭和四十五年の一月～八月の四十日間に、鳥取県下の十五地点で、いわゆる程度副詞語彙について調査をおこなった（同時に、代名詞語彙、性向語彙についても調査をおこなった）が、その際、老・少二層の差異の大きいことに驚いたのである。また、鳥取県東・西両伯耆地方方言の副詞語彙の差異的対立の実態とそれが意味するところの解釈についてまとめた際、老・少二層の間にきわめていちじるしい差異的対立がみとめられると同時に、日々の方言生活で使用頻度の高い基本的語彙においては、老・少二層に共通するものが意外に多くみとめられることに、気づきもしたのである。また、共通語語彙がはたす役割も、老・少二層の程度副詞語彙においては、かなり異質的である。

そこで、鳥取県の因幡地方方言のいわゆる程度副詞語彙において、老年層と少年層との間に、

1、どのような差異がみとめられるか

(1)、老年層特有語彙の帰納

(2)、少年層特有語彙の帰納

2、どのような共有語彙がみとめられるか

そして、

3、当該方言のいわゆる程度副詞語彙の将来

はどうなるであろうか、などの問題について、以下に、討究を試みてみたい。とくに、老・少二層の共有語彙は、今後も、因幡地方方言に存続する可能性が大であり、「当該方言のいわゆる程度副詞語彙の将来」を予測せしめる重要な手がかりとなると考えられる。

なお、調査地点は、

1、鳥取県岩美郡国府町宮ノ下
2、鳥取県岩美郡岩美町本庄
3、鳥取県岩美郡国府町法花寺
4、鳥取県気高郡気高町常松
5、鳥取県気高郡青谷町夏泊

の五地点であり、三地点以上の地点で使うという回答が得られたものを、因幡地方方言として処理することにする。調査は、筆者が用意した調査簿を用い、現地において質問法によって進めた。各地点とも、老年層（六十才台）四名、少年層（中学二、三年生）四名の

計八名について、調査をおこなった。

一、老・少二層の差異的対立の実態とその意味

老・少二層のいわゆる程度副詞語彙にみとめられる差異的対立の実態は、次の観点から把握することができよう。それは、「老年層特有語彙」を帰納するか、「少年層特有語彙」を帰納するかのいずれかである。これは、結局、一つのことであり、「老年層特有語彙」を帰納すれば、それは同時に「少年層特有語彙」を帰納することになる。しかし、ここでは、その両者を示す必要があるので、

(一)、老年層特有語彙

(二)、少年層特有語彙

を列挙し、それぞれが意味するところについて、できるだけ詳しく考究してみることにする。

(一)、老年層特有語彙

1、「分量関係」の副詞語彙

①「数・量の多いこと」「ものの大きいこと・程度のはなはだしいこと」をあらわすもの

ボッコ・ボッコー・ボッコニ（たくさん・ずいぶん・たいそう）・ギョーサン（たくさん）・タイソー（たいそう）・マコトニ（実に）・アラマシ（だいたい）・アバキガツカンホド・シゴガツカンホド（どうにもならないほど）・バクタイ（ずいぶん・たいそう）

②「数・量の少ないこと」「ものの小さいこと・程度の小なること」をあらわすもの

チョッコラ・チョッコリ（すこし）・サラニ（てんで）・ズダイ（てんで・全く）・イッコー（いっこう）・ボダイ・ボード（てんで・全く）

③「回数の多いこと」をあらわすもの

セワイテ・シェワイテ（たびたび・しょっちゅう）・マイド（いつも）・タンビタンビ（たびたび）・ノトロニ（ひっきりなしに）・トーシニ（しょっちゅう）・エータイ（ひっきりなしに）

④「回数の少ないこと」をあらわすもの

メッタ（めったに）

⑤「程度のほぼふさわしいこと」をあらわすもの

ヤンバイニ・エーアンバイニ（いいぐあいに）

⑥「比較関係」のもの

モチト・マチト・マーチート（もうすこし）

2、「時間関係」の副詞語彙

①「時間の長・速（早）」をあらわすもの

モーヒャー・モーヘー（もうずでに）・ヘー（もう・こんなに早く）・ヒサーシ（久しく）

②「時間の短・遅」をあらわすもの

チョッコリ（すこし）・チョイト（ちょっと）

③「過去の時制」をあらわすもの

アトゴロ（このまえ）・センド・シェンド（このまえ）・センニ（このまえ・以前）・コニャーダ（このあいだ）

④「現在の時制」をあらわすもの

キンネン（近年）・キンジツ（近日）

⑤「未来の時制」をあらわすもの

イマダ（まだ）・サキザキ（将来）

⑥「継続・反復」をあらわすもの

オイオイ（次第に）

以上が、老年層特有語彙の実態である。これには、意味分野によって、かなり注目すべき差異がみとめられる。もっとも比率の高いのは、「回数の多いこと」「時間の長・速（早）」をあらわす意味分野であり、全体の三三・三％を占めており、ついで、「比較関係」「過去の時制」をあらわすもので、それぞれ、三〇・〇％、三〇・七％を占めている。逆に、もっとも比率の低い意味分野は、「回数の少ないこと」「継続・反復」をあらわすもので、それぞれ一〇・〇％、九・〇％である。これが、一般傾向か、それとも因幡地方方言に特徴的な傾向であるかは、今後の検討に待たなければならない。(注1)

ところで、老年層特有語彙を見てみると、いくつかの注目すべき事実に気づくことができる。すなわち、まず、「文章語的な色彩」「改まった場面で用いられる性格」の強いものが、かなり多くみとめられるということである。

タイソー・マコトニ・アラマシ・サラニ・イッコー・マイド・キンネン・キンジツ・イマダ

などである。これらの語は、土地人の意識に即して考えてみると、共通語意識よりはむしろ、文章語という理解のしかたの方が強いように思われる。このような性格の語彙とともに、それとは全く逆の、

ボッコ・ボッコー・ボッコニ・アバキガツカンホド・シゴガツカンホド・チョッコリ・ズダイ・ボダイ・ボード・セワイテ・シェワイテ・ノトロニ・エータイ・ヤンバイニ・マチト・マーチート

などの語が多くみとめられる。これらは、いずれも、土地人が、純粋に自己の方言として把握している性格のものである。老年層特有語彙の中に、このような性格の全く相反する語彙が並存しているという事実は、注目に値すると考えられる。このような性格の語彙とともに、

モーヒャー・モーヘー・ヘー・コニャーダのように、いちじるしい転化形も、やはり、老年層特有語彙となっている。これらの語には、

モーヒャー・モーヘー←→モーハイ
ヘー←→ハイ
コニャーダ←→コナイダ

のような非転化形（共時意識に立って）がみとめられ、この非転化形は、少年層も使用するのである。

したがって、①「文章語的な性格の濃厚なもの」②「方言的色彩の顕著なもの」③「いちじるしい転化形」は、いずれも、今後、だんだんと用いられなくなる可能性があると予想されるが、この三者のうち、どれに所属する語彙がもっとも早く衰微するかについては、今のところ、明確にし得ない。

(二)、少年層特有語彙

1、「分量関係」の副詞語彙

①「数・量の多いこと」「ものの大きいこと・程度のはなはだしいこと」をあらわすもの

ゴッツ（たくさん・たいそう）

④「回数の少ないこと」をあらわすもの

チョクチョク（ちょくちょく）

2、「時間関係」の副詞語彙

①「時間の長・速（早）」をあらわすもの

モースグ（もうすぐ）

②「時間の短・遅」をあらわすもの

チートナカイ（すこしのあいだ）

少年層特有語彙がほとんどみとめられないということは、少年層が新しい副詞を製作することに、積極的な役割を果していないことを意味していると考えられる。老年層特有語彙を、もし、今後も、少年層が継承せず、しかも新しい語を積極的に製作しないならば、当該方言の副詞語彙の世界は、必然的に、単純な体系となっていくであろう。しかし、少年層は、老年層の副詞語彙を全て捨て去ろうとしているのではなく、かなり多くの語彙を積極的に継承しようとしているのである。それらの語が、どのような性格のものであるかについて、以下、見ていくことにする。

二、老・少二層の共有語彙の実態とその意味

㈠、「分量関係」の副詞語彙

①「数・量の多いこと」「ものの大きいこと・程度のはなはだしいこと」をあらわすもの

エット（たくさん）・ヤット（たくさん）・ヨーケ・ヨーケー・ヨケー・ヨケ（たくさん）・ズイブン（ずいぶん）・タクサン（たくさん）・エライ（たいそう・ずいぶん）・イッパイ（いっぱい）・ダイブ・ダイブン（だいぶ）・トテモ・トッテモ（とても）・イカサマ（なんと・ずいぶん）・タイヘン（たいへん）・ヨホド・ヨッポド（よほど）・ジツニ（実に）・ホンニ（本当に）・ソート（相当）・スッカリ（すっかり）・オーカタ（おおかた）・タイテー（たいてい）・ズット（ずっと）・エライホド（たいそう）・ゴツイコト・ゴツイコト（たくさん・たいそう）・タント（たくさん）

共通語語彙→ズイブン・タクサン・ダイブ・トテモ・タイヘン・ヨホド・ジツニ・ソート・スッカリ・オーカタ・タイテー・ズット

②「数・量の少ないこと」「ものの小さいこと・程度の小なること」をあらわすもの

スコシ（すこし）・チート・チョット（すこし）・チョッコシ（すこし）・チョッピリ（すこし）・アンマリ・アンマシ（あまり）・チョットモ（すこしも）・チートモ（すこしも）・チョッコシモ（すこしも）・イッカナ（すこしも・全く）・ヨーニ（すっかり）・タッタ（たった）・タショー（多少）・ワリアイ（わりあい）・ワリカタ（わりかた）・ワズカニ（わずかに）・タイシテ（たいして）・サッパリ（さっぱり）・テンデ（てんで）・ドダイ（てんで）

共通語語彙→スコシ・チョット・チョットモ・タッタ・タショー・ワリアイ・ワリカタ・ワズカニ・タイシテ・サッパリ・テンデ・ドダイ

③「回数の多いこと」をあらわすもの

サイサイ（たびたび）・シジュー（始終）・ショッチュー（しょっちゅう）・イツモイツモ（いつも）・タビタビ（たびたび）・タンビニ（たびたび）・ヤタラニ（やたらに）・タンビタンビ

（たびたび）・イジョー（しょっちゅう）・ツズイテ（つづいて）

共通語語彙←シジュー・ショッチュー・タビタビ・ヤタラニ・ツズイテ

④「回数の少ないこと」をあらわすもの

メッタニ（めったに）・ロクニ（ろくに）・トキドキ（ときどき）・トキオリ（ときおり）・トキタマ（ときたま）・トキタマニ（ときたま）・チョイチョイ（ときどき）

共通語語彙←メッタニ・ロクニ・トキドキ・トキオリ・トキタマ

⑤「程度のほぼふさわしいこと」をあらわすもの

ダイタイ（だいたい）・チョード（ちょうど）・エーコロ（いいかげんに）・エーカゲンニ（いいかげんに）・エーカゲンデ（いいかげんで）・エーヤンバイニ（いいあんばいに）・エーグァイニ（いいぐあいに）

共通語語彙←ダイタイ・チョード

⑥「比較関係」のもの

モット（もっと）・マット（もっと）・モーチット・モーチート（もうすこし）

共通語語彙←モット

以上が、「分量関係」の副詞語彙中の老・少二層の共有語彙の実態である。このうち、一応、共通語語彙と見なし得るものが三十五語みとめられるので、非共通語語彙（これを、仮に、方言語彙と呼ぶことにする）は、四十三語ということになる。老年層特有語彙のうち、方言語彙と見なし得るものが、全部で二十五語みとめられたので、それよりも十八語多いことになる。すなわち、当該方言の少年層は、かなり多くの方言語彙を積極的に継承しようとしている、と言うことができよう。これらの方言語彙は、老年層特有語彙とはその性格を異にしており、いわば、生活基本語彙として把握することのできる性格のものであると考えられる。いずれも、使用頻度がかなり高く、日常生活のその場この場で、よく聞くことのできるものばかりである。①の「エット・ヤット・ヨーケ・ヨケー・エライ・ダイブン・トッテモ・ヨッポド・ホンニ・ゴッツイコト」、②の「チート・アンマリ・イッカナ・ヨーニ」、③の「サイサイ・イジョー」、④の「チョイチョイ」、⑤の「エーコロ・エーカゲンデ」、⑥の「マット・モーチート」などが、当該方言の「分量関係」の副詞語彙の中で、もっとも基本的なものであると言えよう。したがって、これらの基本的語彙は、少年層の言語生活に、今後もかなり根強く息づいていくことが予想される。

ところで、共通語語彙が、老・少二層の「分量関係」の副詞語彙において占める割合には、かなり注目すべき差異がみとめられ、

老年層――三五・〇％

少年層――四五・一％

である。両者の間に、一〇・一％の差異が見い出されるわけである。すなわち、少年層の「分量関係」の副詞語彙においては、共通語語彙がはたす役割が、老年層の場合よりも、かなり大きいということである。しかし、両者の差異が一〇・一％にとどまるというのは、筆者の当初の予想を、かなり下回るものである。

(二)、「時間関係」の副詞語彙

①「時間の長・速（早）」をあらわすもの
モー（もう）・モーハイ（もうすでに）・モースグ（もうすぐ）・サーシ（久しく）・ナンボシテモ・ナンボシタッテ（いくら待っても）・ユックリ（ゆっくり）
共通語語彙→モースグ・ユックリ・モー
②「時間の短・遅」をあらわすもの
チートマ（少しのあいだ）・チートノマ（少しのあいだ）・チョット（少し）・チートノアイダ（少しのあいだ）・チョットノマ（少しのあいだ）・チョイト（少し）
共通語語彙→チョット
③「過去の時制」をあらわすもの
モト（もと）・コナイダ（このあいだ）・コノマエ（このまえ）・イゼン（以前）・マエ（まえ）・モトモト（もともと）・モトカラ（もとから・以前から）・サキゴロ（この前）
共通語語彙→モト・コノマエ・イゼン・マエ・モトモト・モトカラ
④「現在の時制」をあらわすもの
サイキン（最近）・チカゴロ（近頃）・イマゴロ（今頃）・イマジブン（いまじぶん）・ゲンニ（現に）・イマ（今）・コノゴロ（この頃）
共通語語彙→サイキン・チカゴロ・イマゴロ・イマジブン・ゲンニ・イマ・コノゴロ
⑤「未来の時制」をあらわすもの
マダ（まだ）・マンダ（まだ）・マダマダ（まだまだ）・マンダマンダ（まだまだ）・イマダニ（いまだに）・コンゴ（今後）・モースグ（もうすぐ）・モージキ（もうすぐ）・シバラク（しばらく）・サキニ（先に）・ショーライ（将来）・ヤガテ（やがて）
共通語語彙——マダ・マダマダ・イマダニ・コンゴ・モースグ・モージキ・シバラク・サキニ・ショーライ・ヤガテ
⑥「継続・反復」をあらわすもの
マイトシ・マイネン（毎年）・ズット（ずっと）・ズーット（ずっと）・ダイダイ（代々）・ジュンニ（次第に・順に）・ジュンジュンニ（順々に）・シダイニ・シダイシダイニ（次第に）・イツモ・イツモ（いつも）・イツモイツモ（いつもいつも）
共通語語彙——マイトシ・マイネン・ズット・ズーット・ダイダイ・ジュンジュンニ・シダイニ・シダイシダイニ・イツモ・イツモイツモ
「時間関係」の副詞語彙における老・少二層の共有語彙の、全体における比率は、七四・三％である。「分量関係」の副詞語彙における共有語彙率は七〇・九％であるから、「時間関係」の副詞語彙の方が、三・四％多いことになる。しかし、この差は、ほとんど問題にならないと思う。「時間関係」の副詞語彙のことなり語数が、「分量関係」の副詞語彙のそれよりも少ないので、その分だけ、共有語彙率が高くなっていると考えることができよう。とにかく、老・少二層の共有語彙率が、七割をこえるということは、注目すべき事実であると言えよう。もっとも、今回の調査地点は、いずれも、郡部の純農業部落を対象としているので、都市部で同様の調査をおこなえば、この率は、もっと低くなることが予想される。
さて、右記の共有語彙のうち、共通語語彙をのぞく、①の「モーハイ・サーシ・ナンボシテモ・ナンボシタッテ」、②の「チート

マ・チートノマ・チートノアイダ・チョットノマ」、③の「コナイダ・サキゴロ」、⑤の「マンダ・マンダマンダ」、⑥の「ズーット・ジュンニ・イッツモ」などは、当該方言の「時間関係」の副詞語彙の中でもっとも基本的なものである、と言うことができよう。これらの語は、今後も、当該方言に、かなり長く存立しつづけることが予想される。

ところで、「時間関係」の副詞語彙においては、共通語語彙の占める比率が、かなり高くなっている。老年層は、五六・〇%、少年層にいたっては七一・七%の高率である。これは、逆に言えば、「時間関係」の副詞語彙においては、方言形が、それだけ貧弱だということになる。この結果を、「分量関係」の副詞語彙と比較すると、次のようになる。

	分量関係	時間関係	
老年層	35.0%	56.0%	(21.0%)
少年層	45.1%	71.7%	(26.6%)

「時間関係」の副詞語彙においては、老年層と少年層との間に、一五・七%の差異がみとめられるわけである。

三、当該方言のいわゆる程度副詞語彙の将来

一、二において検討した結果にもとづいて、我々は、当該方言のいわゆる程度副詞語彙の将来を予測することが、ある程度可能となった。すなわち、老年層特有語彙として帰納したものは、今後、ますます衰微していくことが予想され、老・少二層の共有語彙として帰納したものは、今後も、かなり長く、当該方言に存立しつづけることが予想される。しかし、老年層特有語彙のうち、とくに、「文章語的色彩の濃厚なもの」は、今後、少年層が、それらの語彙を必要とする場面に立つことは容易に予測されるので、老年層特有語彙が、すべて、今後、用いられなくなるとは、ちょっと考えられない。今日の時点において、老年層特有語彙として帰納したものを、中学二、三年生が継承するとしたら、いったい、どの時点において（具体的に言えば、何歳になったら）継承するものか、今後の追跡調査に興味が持たれる。そのような含みを持っているにしても、老年層特有語彙として帰納したものは、一応、今後、衰微していくことが予想され、老・少共有語彙として帰納したものは、今後も存続しつづけることが予想されるのである。そこで、以下に、今後も存続しつづけることが予想される語彙と、今後衰微していくことが予想される語彙とを、もう一度、まとめて表示してみる。要するに、当該方言のいわゆる程度副詞語彙は、今後、老・少二層の共有語彙を根幹として存立していくことは、まず間違いないであろう。

(一)、今後も存続しつづけることが予想される語彙――一三五語（七八・五%）

1、「分量関係」の副詞語彙――八〇語

①エット・ヤット・ヨーケ・ヨーケー・ヨケ・ズイブン・タクサン・エライ・ダイブ・ダイブン・イッパイ・トテモ・トッテモ・イカサマ・タイヘン・ヨホド・ヨッポド・ジツニ・ホンニ・ソートー・スッカリ・オーカタ・タイテー・ズット・エライホド・ゴツイコト・ゴツイコト・タント・ゴッツ――三〇語

②スコシ・チート・チョット・チョッコシ・チョッピリ・アン

マリ・アンマシ・チョットモ・チートモ・チョッコシモ・イッカナ・ヨーニ・タッタ・タショー・ワリアイ・ワリカタ・ワズカニ・タイシテ・サッパリ・テンデ・ドダイ——二一語

③サイサイ・シジュー・ショッチュー・イツモイツモ・タビタビ・タンビニ・ヤタラニ・タンビタンビ・イジョー・ツズイテ——一〇語

④メッタニ・ロクニ・トキドキ・トキオリ・トキタマ・トキタマニ・チョイチョイ・チョクチョク——八語

⑤ダイタイ・チョード・エーコロ・エーカゲンニ・エーカゲンデ・エーヤンバイニ・エーグアイニ——七語

⑥モット・マット・モーチット・モーチート——四語

2、「時間関係」の副詞語彙——五五語

①モー・モーハイ・モースグ・サーシ・ナンボシテモ・ナンボシタッテ・ユックリ・モースグ——九語

②チートマ・チートノマ・チョット・チートノアイダ・チョットノマ・チョイト・チートナカイ——七語

③モト・コナイダ・コノマエ・イゼン・マエ・モトモト・モトカラ・サキゴロ——八語

④サイキン・チカゴロ・イマゴロ・イマジブン・ゲンニ・イマ・コノゴロ——七語

⑤マダ・マンダ・マダマダ・マンダマンダ・イマダニ・コンゴ・モースグ・モージキ・シバラク・サキニ・ショーライ・ヤガテ——一二語

⑥マイトシ・マイネン・ズット・ズーット・ダイダイ・ジュンニ・ジュンジュンニ・シダイニ・シダイシダイニ・イツモ・イツモ・イツモイツモ——一二語

(ニ)、今後は衰微していくことが予想される語彙——三七語（二一・五%）

1、「分量関係」の副詞語彙——二六語

①ボッコ・ボッコー・ボッコニ・ギョーサン・アラマシ・アバキガツカンホド・シゴガツカンホド・バクタイ——八語

②チョッコラ・チョッコリ・サラニ・ズダイ・ボダイ・ボード——六語

③セワイテ・シェワイテ・タンビタンビ・ノトロニ・トーシニ・エータイ——六語

④メッタ——一語

⑤ヤンバイニ・エーアンバイニ——二語

⑥モチト・マチト・マーチート——三語

2、「時間関係」の副詞語彙——一一語

①モーヒャー・モーヘー・ヘー・ヒサーシ——四語

②チョッコリ・チョイト——二語

③アトゴロ・センド・シェンド・センニ・コニャーダ——五語

④なし

⑤なし

⑥なし

すなわち、当該方言のいわゆる程度副詞語彙のうち、約八割のものが、今後も、かなり長く継承されていくであろうことが、予想されるのである。ただ、二地点以下にみとめられた語形、調査を進めていく過程において調査簿に補足することのできた約二〇語の語形

などについては、あえて、ここにとりあげることはしていない。したがって、それらを加えると、この数値は、多少の変動がみとめられようが、しかし、基本的な点では、大きな変動はみとめられないものと思う。

おわりに

以上で、当該方言のいわゆる程度副詞語彙の現状の分析と将来の予想についての論述を終えることにする。当該方言の老年層特有語彙、少年層特有語彙、老・少二層の共有語彙、老・少二層の程度副詞語彙において共通語語彙がはたしている役割などに関するいくつかの事実や傾向が、当該方言に特徴的なことであるかどうかは、今後、東伯耆地方方言、西伯耆地方方言(注2)、さらには、山陰方言中の要地について、同様の討究を試みることによって、明らかにすることができると考えている。

(注1) 試みに、西伯耆・東伯耆の「回数の多いこと」「時間の長・速(早)」をあらわすもの、「回数の少ないこと」「継続・反復」をあらわすものの老年層特有語彙の比率を求めてみると、次のようである。

	西伯耆	東伯耆
回数の多いこと	41.3%	38.5%
時間の長・速(早)	52.9%	41.7%
回数の少ないこと	27.3%	9.1%
継続・反復	30.7%	9.1%

この結果から、老年層特有語彙の比率には、地方地方で、かなり顕著な差異のみとめられることが明らかであろう。ただ、「回数の少ないこと」「継続・反復」をあらわすものの比率からすると、東伯耆地方方言が因幡地方方言にかなり近い様相を示している、と言うことができよう。

(注2) 西伯耆・東伯耆においても、少年層特有語彙はきわめて少なく、次のようなものがみとめられるにすぎない。

ズット・メッポー・タイシテ・サッパー・チョイト(以上、西伯耆)、ギョーサン・エライホド・チョッピリ・タイシテ・チョクチョク(以上、東伯耆)

(一九七一・一・一五)

——鳥取大学教育学部助教授——